

「食 道」

編集責任者 並木 正義 (北海道大学助教授)

東京女子医科大学消化器病センター所長

中 山 恒 明

御存知のように、消化管の診断学というのは、レントゲンの検査をルチンとして、発達してまいりました。しかしながら、特に、最近の五年間は、いわゆる内視鏡、ファイバースコープの器械の大変な進歩によりまして、消化管診断の主流は次第に内視鏡に移りつつあると言っても過言でないと思います。ちょうど、この時期にあたって、消化管内視鏡診断学大系が出版されるということは現在の内視鏡による、各疾患の診断に足がかりとなる知識を若い人達に与える意味で、非常に大切なことであり、時宜を得たものと思います。

特に食道は、以前は硬性の食道鏡でありましたので、非常に危険で特殊な技術を要し、また、患者の苦痛も、非常に大きかったものでありますが、現在、ファイバースコープを用いますと、特殊な技術的訓練を必要

とせずに、的確に、直視下で病巣を発見し、診断し、パイオプシーによって組織像まで正確に診断できる時代となりました。しかし、そうした正確なファイバースコープによる食道鏡検査が現在、指導的な各大学の教室のようなところで行なわれておるだけで、未だルチンとして一般の開業の臨床家がこれを十二分に駆使するというほどにはなっておりません。また、食道疾患は、ある意味において他の胃疾患などと比べて、まれでありますので一般臨床家が自分で臨床的に、いろいろな疾患の症例を目で見て、訓練し上手に診断するというまでには至っておりません。御存知のように診断学というのは、まず、診断の知識を持って、そして患者を診るということで、特に内視鏡は、はっきりとその病巣を見ることができるといふ点に、特徴がござ

います。しかし、見えてもそれが何であるか、ということを知らなければ的確な診断はできません。この「第二巻、食道」の部をよく見ますと、我々が、いままで、何十年間に経験した、あらゆる種類の食道疾患のきれいな代表的な内視鏡像を全て網羅しております。と言うのは、これは専門にその分野をやっておる教室が1つではなく、日本全体が集まって、その指導的な人々がその特徴ある自分の専門分野を受け持って、執筆しているということが特徴であると思います。従って、現段階で全世界から、出版されておるこの種の書籍の中で最もすぐれた指導書であると、私は考えます。したがって各臨床家が、食道鏡を使う以上、本書を座右に備えて参考にするには、診断を的確にするという為にも意味があり、更にその鑑別診断なり、また手術の適応なりを同時にはっきりとわかりやすく記載しておりますので本書は是非、そのような人々が座右に備えて参考にするべき本であると思っております。

B 5 頁244 図202 写真99 原色図
233 ¥22,000 ㊦200 医学書院刊